

国経研だより

神奈川大学 国際経営研究所
〒259-1293 平塚市土屋 2946
神奈川大学湘南ひらつかキャンパス
Tel. 0463-59-4111 (内線 2200)

『排外と排外』のその先へ

石積 勝

政治学者神島二郎の手になる独創的な分析の視角と言説は数限りなくあるが、その中のひとつに「排外と排外」の議論がある。この「排外と排外」の議論は日本社会、日本の歴史を論じる際に直接・間接にキーワードとして援用されてきた。例えば山本新氏は「明治維新以来 100 年を超える歴史において欧化的風潮と国粹的風潮とがほぼ 20 年おきに交代している」（『周辺文明論』1985）と述べ、青木保氏は『日本文化論の変容』（1990 年）において 1965 年から 85 年までが「国粹」になり 85 年からは「欧化」になってきたと述べている。この仮説に従えば 85 年からの 20 年は、つまり 2005 年ごろまでは、グローバリズムが叫ばれ、小泉政権の時代はまさに「欧化」「米化」の空気の中にあったということになる。

周期を 20 年でなくもっと大きくとってみても、日本社会の歴史は「排外」と「排外」の繰り返しであったといえよう。鎖国という排外の極みから一転して、明治鹿鳴館の排外の時代があった。その後、今度は逆に第二次大戦前にそのピークを迎える極端な排外主義を我々は経験した。そして敗戦後は、また再び極端な排外の社会に突入することになる。戦後の排外の対象はアメリカであったことは言うまでもない。このふたつのハイ——「排外」ハイと「排斥する」ハイ——の繰り返しの中で我々は今、どこに立っているのだろうか。これからの我々の姿勢はどうあるべきなのだろうか。

2017 年の現在、我々は「国粹の時代」、「ナショナリズムの時代」、「排外の時代」の周期の中にあると言えるかもしれない。安倍首相の下での 2012 年と 13 年の国政選挙の自民党キャッチコピー

は『日本を取り戻す』というものだったが、どうやらこのコピーはますます時代の空気とシンクロしているようだ。個々のいくつかの失点を越えての安倍首相の支持率の高止まりもこのことと関係がありそうだ。17 年 2 月末から火を噴いた森友学園問題も、もっぱら安倍首相夫人の国有地払い下げ問題への関与が争点になっているが、注目すべきは幼稚園で教育勅語が暗唱され、学園理事長、籠池氏の教育姿勢に対する大きな支持が首相以下の多くの政治家や文化人からもあったということだろう。トランプの米国や金正恩の北朝鮮の動きも『日本を取り戻そう』という気分を後押しする。我々はいま「排外」とまでも言わなくとも、新しいナショナリズムの空気の中にいる。

ところで「排外」にせよ「排外」にせよ、その特徴は他者を、対象を強烈に意識している点にある。自画像を自ら描くというよりは、外の世界に対する対応がその出発点にある。そして「排外と排外の間」で、メトロノームのように右から左、そしてまた右へ揺れ動く姿は文明の周辺地域の宿命ともいえる。島国状況の中で文明の周辺地域としての位置を持つ日本社会のひとつの宿命ともいえよう。しかし 21 世紀の現在、あらたな情報革命のこの時代、20 世紀までの中心—周辺という枠組みは物理的にも心理的にもそれこそ革命的に大きく変わりつつある。「排外と排外の枠組み」を越えて、今こそ我々は固有の歴史的社会的経験を咀嚼し、大胆に主体的に自らの自画像を描き、大地球社会の中で、排外でもなく、排斥するのでもない大きな構想と心のあり方を切り拓きたいものだ。

(所長/いしづみ・まさる)

日々、増え続けるデータの時代

行川 一郎

■ 研究倫理強化の中で

2013年度から2期4年間、所長の任をつとめさせていただきましたがこれも所員の方々をはじめとする関係各位の皆様のサポートと並ならぬご協力があったとのこと、此処で厚く感謝申し上げます。

神奈川大学では2010年度から研究と教育に関する支援体制強化が図られ、その一貫としての研究支援部の設置、研究所およびセンターの組織拡大と拡充が進められてきました。実際、本学の研究体制にとってはある意味息風、順風満帆そのものだった訳ですが、研究畑に属する者たちにとっては旧い身を引き締めるべき事態が招来しました。

それはまあでもないSTAP細胞発見のニュース(2014年1月)とその後の展開が及ぼしたバタフライ効果と表現しても良いような波及的影響のことです。

元来、研究と教育に携わる者すべてに要求されることとして能力、意欲、意識がえて責任の重さに対する正しい自覚と強い倫理感が挙げられると思います。が、しかし現今で研究者について性善説に立った目で見ると以前に比べて薄れてしまった感があります。その証左は、研究者の倫理強化についての実に様々な事項と部面に関する文部科学省の全国大学研究機関に対する諸通告が如実に表れています。

殷鑑遠からず。研究者もしくは自分(達)は「善」に決まっている、というのはあまりに不遜でしょう。あくまで謙虚であるべきですし、人を以て鑑と為す先人の教えに従い、今までと変わる事無く真摯に研究を進めていくという正しい姿勢を保つていければよいことでしょう。

ただ、医歯薬理工系等の研究者に求められている研究結果の確実な保管と保証が代表される、研究データのフォローアップ体制が社会科学系、人文科学系の研究者にも求められてきています。今後、デジタルデータにアーカイブすることも含め文系の研究者にも研究倫理の一環として自分の研究データの保管と保証が求められていくこととなります。

昨今、ハードカバー版の100頁、200頁ものの記録用「研究ノート」が理系の実験・研究関係者以外にも売れているそうですが、理系とは異なる研究データの扱いを私たちはこれからどうしていくべきなのでしょう。課題です。

■ 身のまわりにあふれかえるデータ

ビッグデータ時代の喧伝され出した頃、地球上のデータ量がIoT社会では爆発的に増えていくだろうと危惧されました。それ

は現実となり、米EMC社によると2020年にはデータ量は44ZB(ゼタバイト)になるとか。地球すべての砂粒の数が1ZBと言われても身のまわりのデータの整理もおぼつかない我が身に想像を超えた数字。前頁の研究データの管理責任にもつながることとして、いわゆるアナログ時代に育った当方にとってデジタル時代ともいえる今日、データの整理と管理、そして保管試みどころです。

先日、旧友から両親の遺品の中のMC(マイクロカセット)テープを再生したいとの話が届きました。MCテレコが手もとにあったので

に立てることができましたが、自分自身でも忘れていた30年近く前の会議を記録したMCテープが保管ケースから出てきて「死蔵データそのものだなあ」と慨嘆したところです。



【写真】MCテレコや様々な記録用メディア類

埋もれたアナログデータをどうするかはデータの必要性和重要性に依存する訳ですが、日を追って増えるデータの多くが“ダークマター”と通称される評価の定まらないものなのが現実です。

過去の蓄積データ、現在創り出されているデータ、未来に産まれるデータそれぞれへの処し方採りたちが思っている以上に深刻で重要な課題をはらんでいる筈です。なぜならば、データの持つ価値を正しく評価できる者がその時代には存在しないことさえ考え得るのです。

更に悪いことに、データをアーカイブしようにも取り出そうにも媒体規格が旧世代となってしまう、プライベートにせよ業務にせよ研究にせよ過去のデータが扱えず現在にも未来へも引き継げない現実が次々に発生しています。

クラウドに放り込んで安心するのは技術は未完。私たちの未来に一抹の不安を感じるこの頃です。

(所員/なめかわ・いちろう)

—編集後記— 53号をお届けします。年度初めということで、国際経営研究所の前・新両所長から御寄稿頂きました。微力ですが、次号以降も所員各位の研究活動に役立つような紙面づくりをできればと願っております。(Y)